



F.クーブラン生誕350年記念
エレガンスの極み

バッハからのメッセージ Vol.14 F.クーブランの影響①

バロックヴァイオリン 佐藤 泉
オルガン・チェンバロ 山名 朋子

ヴェルサイユ宮殿聖堂 中央は F.クーブランが弾いたパイプオルガン

2018 11/17 (土) 14:30開場
15:00開演

カトリック加古川教会

加古川市加古川町木村57

一般3000円 学生1000円 ※小学生未満のご来場はご遠慮ください。

●お問い合わせ・チケット予約 10月31日までにご予約の方は早割チケット適用で一般2500円になります。

古楽工房 電話 079-435-1157(9:00~18:00) (メール予約) atelierkogaku2000@gmail.com (こちらからの返信をもって)

(ご予約完了とさせていただきます)

主催/古楽工房 <https://www.facebook.com/古楽工房> 後援/加古川市教育委員会 日本チェンバロ協会

F.クープレラン生誕350年記念 エレガンスの極み

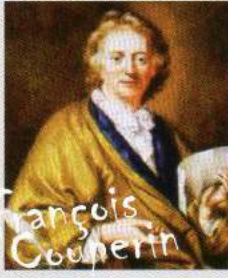
プログラム

F.クープレラン

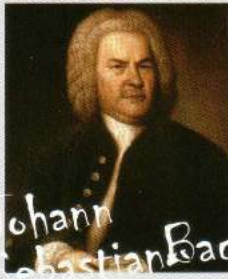
教区のためのオルガンミサ「主よ、憐れみたまえ」(1690)
「ほむべきかな、主の名によりて来たる者」クラヴサン奏法「前奏曲7番」
クラヴサン曲集より/刈り入れをする人々/羊飼いたち/ティク・トク・シヨク
コンセール第11番ハ短調(1724)

J.S.バッハ

フランス組曲第4番変ホ長調BWV815
チェロ組曲第2番(ヴァイオリンに転用イ短調)BWV1008
ヴァイオリンとオブリガートチェンバロのためのアダージョ ト長調BWV1019



「アールヌーボー展」パンフレット冒頭に、日本の有田焼や新選組の様な羽織を見つけて驚く私に、フランスの友人が言った「1867年パリ万国博覧会に初めて出品された日本工芸品が放つ美と輝きは、フランス人を愕然とさせた。それはフランスが1789年の革命で自ら破壊し失ったものだったから。革命の「自由、平等、博愛」の理念は良くても、宮廷文化の衰退と共に腕のある職人が消え、産業革命もあって量産品が溢れ、生活のあらゆる場面で「美しい！」「ことに気づかされたという訳。そのショックがアールヌーボーの原動力だったと思う」(ベルギーに負けたサッカー日本の悔しさ、「忍者や侍の動きが取り戻せれば負けないのに・・・」みたいな?)かくて忍耐強く修復されたヴェルサイユ宮殿やパリの街並みが、今もフランスの威信を背負っている。



17世紀末から18世紀初頭、まだ傷一つなかったヴェルサイユ宮殿で、ルイ14・15世のためにミサやサロンで音楽を提供したのがF.クープレランであった。聴衆が王と周りの貴族であったため、その音楽は優雅、繊細、たおやかに深い洞察力で人間の心模様を語る。大きな音、歌手の甲高い絶叫などは一音もない。「フランス、中庸が大事」とでも言うように、落ち着いて距離を置いた姿勢を崩さない。その良きセンスにJ.S.バッハは注目していた(と思う)。ところが、しばらくするとそのプライド高きフランスの作曲家達が「オペラ(歌)をきっかけに生まれたイタリアのバロック音楽と 優雅で繊細なフランス趣味(ダンスやフランス宮廷歌謡)の融合」を模索し始めた。抒情的かつドラマティックなコレルリやヴィヴァルディの魅力には逆らえなかったのである。

しかし融合とは言うは易しで「大阪弁と京言葉を融合する」に近いこの試みは、お互いの長所を相殺する危険があった。どちらかの特徴を消したり、弱めたりして融合するのではなく、強烈な性質のまま共存させるのだから、これはまさにどの家庭も、どの社会も直面する難行である。しかしクープレラン達の努力は、程なくしてバッハへ引き継がれ完成を見る。まるで熟成する土地によって味が違うワインやチーズの様にそれぞれの香りと味わいを放って。

一回目は伝統的なフランス様式で二人が書いた作品を中心に、次回以降はじわじわとイタリアの手法が混じり始め、見事に共存するまでをお届けする。



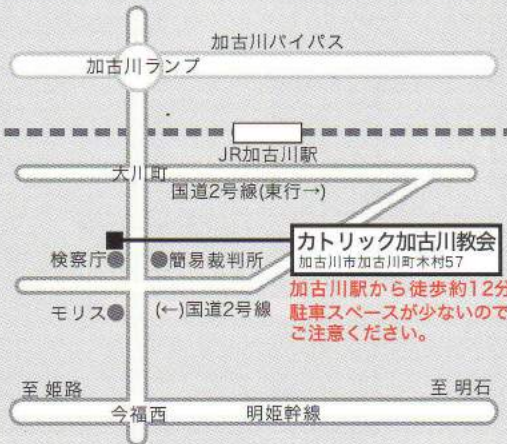
バロックヴァイオリン 佐藤 泉

加古川市立平岡中学、兵庫県立加古川西高校、京都市市立芸術大学音楽学部卒業後、神戸市立室内合奏団にて活動。1994年からブリュッセル王立音楽院にてバロックヴァイオリンをシグスヴァルト・クイケンに、室内楽をバルトルド・クイケンの各氏に師事。1996年NHK・FMに出演。1999年栄誉賞付きディプロマを取得。2005年から2年間東京芸術大学音楽学部古楽科非常勤助手を務める。2010年加古川市制60周年記念事業「加古川ゆかりの音楽家リレー演奏会」第一回出演。2016年「ラ・プティット・バンド」マタイ受難曲ツアー参加。昨年バルトルド・クイケンとのBach「音楽の捧げもの」出演。



オルガン・チェンバロ 山名 朋子

フェリス学院短期大学音楽科研究科(ピアノ科)卒業後チェンバロを始める。1989年古楽コンクール<チェンバロ部門>第三位に入賞。アムステルダムのスウェーリンク音楽院チェンバロ科とフォルテピアノ科をそれぞれソリストディプロマを取得し卒業。チェンバロを渡邊順生、グスタフ・レオンハルト、フォルテピアノをスタンリー・ホーホランドの各氏に師事。バッハの『ゴルトベルク変奏曲』(2001年)、『フーガの技法』(2010年)、横浜みなとみらいホール・レクチャー・コンサートシリーズ「ピアノの歴史」第2回：「謀略家としてのハイドン」(2007年)などに出演。バッハの鍵盤作品全曲演奏コンサート「バッハ マニア」(全21回)、シューベルトの全連弾作品演奏シリーズ「シューベルトティアアア」を継続中。日本チェンバロ協会会員。日本基督教団和歌山教会オルガニスト。



J.S.バッハ(1685-1750)没後250年記念連続コンサート 「バッハからのメッセージ」

- 2000年 オープニング
- 2001年 バッハにおけるバロック音楽誕生の地イタリアの影響
- 2002年 バッハにおけるフランス音楽の影響
- 2003年 バッハ以前のドイツの音楽
- 2004年 同僚ヘンデル・テレマンの音楽
- 2005年 カンタータ
- 2006年 バッハの教育法 対位法への招待
- 2008年 バッハのフルート作品 バルトルド・クイケン氏を迎えて
- 2008年 次男エマニエルの音楽、疾風怒涛、ロココの様式
- 2009年 無伴奏ヴァイオリンのための作品
- 2011年 無伴奏チェロとヴァイオリンのための作品
- 2013年 コレルリを愛した作曲家たち
- 2017年 無伴奏作品(加古川) / 音楽の捧げもの 全曲 (横浜)